

ケアワーカーが行うアセスメントの特徴に関する一考察 ーホリスティック概念を視野に入れてー

笠 原 幸 子

和文抄録

本研究は、ケアワーカーが行うアセスメントに焦点をあて、そのプロセスや特徴を検討しケアワーカーが行うアセスメントにホリスティック概念を導入する意味について検討することを目的とする。研究方法として、ケアワークに先行して研究・実践が行われているソーシャルワークにおけるアセスメントの概念を整理しアセスメントの操作的定義を提案し、そのプロセスを図示する。さらに、Redlの生活場面面接などを参考に、ケアワーカーが行うアセスメントの特徴について検討する。最終的に、これらの検討を踏まえて、ケアワーカーが行うアセスメントにホリスティック概念を導入する意味について考察する。その結果、アセスメントの定義の中にホリスティック概念が包摂されていることが考察され、ケアワーカーが行うアセスメントは、「柔軟性がある」、「精神的な安定の付与」、「共感的理解が可能」、「信頼関係の構築が可能」、「継続的アセスメントが可能」という5点の特徴を持っていることが明らかになった。ホリスティック概念の導入はアセスメントの精度を高め、その実践度を向上させる意味を持つと考察された。今後は、文献整理による思考から論証するだけでなく、その構造やその関連要因を実証的に明らかにしていくことが求められる。

キーワード：ケアワーカー、アセスメント、ホリスティック概念

1 はじめに

高度に発展した社会は、生活に生じた課題を解決するために専門領域を細分化し、専門領域ごとにアセスメントし、当該専門領域が志向する解決方法で対応する傾向がある¹。ケアワーカーにおいても、食事・入浴・排泄・移動等の介護を遂行する上で必要な身体機能の側面から高齢者を理解しようとする傾向があり²、ケアワーカーが行うアセスメントに関する文献は、身体機能状況を観察する内容が多く³、精神心理状況や社会環境状況も含めた生活全体に関するアセスメントの文献はほとんどなかった。

複雑な対象を構成要素に還元することによって理解しようとする要素還元主義の成果を否定するものではないが、岡村⁴は、社会的存在としての人間は複数の社会関係を持っていることから、全体的人間像を見ることの重要性を指摘し、社会福祉的援助の原理の1つとして「全体性の原理」を示した。Smuts⁵は部分を詳細に研究し、各部分を積み重ねたとしても、決して全体には到達できない。なぜならば、全体は部分の総和よりもはるかに大きく異なる特性をもつものだからであると、対象を全体として捉える重要性を示した。1970年代以降、客観性や合理性だけではなく精神性や全体性も注目されるようになり⁶、whole(全体の)、heal(癒す)、health

(健康), wholesome(健全な), holy(聖なる)などを語源とするホリスティック概念は多様な領域で注目されるようになった⁷⁾。

このような状況の下、アセスメントにおいてもクライアント(本論では、文脈を考慮して、援助対象をクライアントまたは高齢者と表記する)を分析して理解するだけではなく、明らかになった複数の情報を再構成して全体としてクライアントをより深く理解することが重要であると考え、クライアントの生活課題は断片的に存在しているのではなく、多様な状況が相互に関連して発生している。真のクライアントに接近するためには、クライアントの生活全体を捉えることが求められる。

そこで、本研究は、ケアワーカーが行うアセスメントに焦点をあて、そのプロセスや特徴を検討しケアワーカーが行うアセスメントにホリスティック概念を導入する意味について検討することを目的とする。従来、ケアワーカーが行うアセスメントに関する研究は十分にされてこなかったが、ケアワーカーのアセスメントについて、ホリスティック概念を視野に入れて検討することは意義があると考え、

研究方法として、ケアワーカーが行うアセスメントについての研究・実践は十分とはいえない^{8・9・10・11・12・13・14)}、また、先行研究^{15・16・17・18)}において、ソーシャルワークとケアワークは、それぞれ役割は異なるが、同じ目標・価値を持つ社会福祉実践であるという指摘がある。よって、ケアワークに先行して研究・実践が行われているソーシャルワークにおけるアセスメントの概念を整理し、ホリスティック概念を視野に入れた、アセスメントの操作的定義を提案する。次いで、ホリスティック概念を視野に入れた操作的定義の理解を深めるため、そのプロセスを図示する。

さらに、Fritz Redl の生活場面面接などを参考に、ケアワーカーが行うアセスメントの特徴について検討する。最終的に、これらの検討を踏まえて、ケアワーカーが行うアセスメントにホリスティック概念を導入する意味について考察する。

2 アセスメント概念の検討

アセスメントは、社会診断という概念を用いて人や問題、そしてその状況を把握する方法として発展してきた。発展過程において、援助対象や目的、あるいは援助する範囲の拡大など多様化傾向が生じ、さらに、ケアマネジメント概念の導入によりケアプラン作成の方法として認識されるようになった。医学モデルに依拠し社会診断と呼ばれていた時代から、システム理論や生態学理論の導入により、生活モデルをよりどころに、クライアントの能力やパートナーシップの形成への関心など、アセスメントの概念は広がりをもって捉えられるようになってい

19・20)

アセスメントという用語がソーシャルワークの方法として登場してから、多くの研究者によって定義されている。ここで重要なことは、Mellor と Lindeman²¹⁾が、高齢者を対象としたソーシャルワーカーは、高齢者の健康やウェルビーイングに影響する身体・心理・社会的要因の相互関連を理解するためホリスティックに3つの側面をアセスメントする訓練を受ける必要があると指摘しているように、客観性が高く把握しやすい疾病や障害状況といった「身体機能状

況」に特化するのではなく、「精神心理状況」や「社会環境状況」なども含めて、クライアントの生活全体を捉えることの重要性を認識することである。

ソーシャルワーク事典第 19 版で Meyer²²は、状況・ニーズ・問題に関係している要因間の関連性をアセスメントすることの重要性を指摘している。さらに、彼女の著書において、把握した情報の複雑な状況を統合するためにはホリスティック思考が重要である²³と指摘している。Sheafor ら²⁴は、環境の中にある人に焦点を当てることは、ソーシャルワーカーがクライアントのさまざまな側面(身体的・知的・情緒的・社会的・家族・スピリチュアル・地域社会等)の相互関係に専心することであり、このような全人的な捉え方は、ソーシャルワーカーの仕事に広がりを与えると指摘している。渡部²⁵は、人とその人が抱かえている問題解決に当たる際には、「部分的アセスメント」では不十分で、「統合的アセスメント」が必要であると指摘している。クライアントの固有性を理解し、最適の問題解決方法を見つけ出すプロセスがアセスメントである²⁶なら、クライアントの生活全体を捉えたホリスティックな視点をもつアセスメントが求められる。白澤²⁷は、クライアントを部分として捉えるのではなく、全体として捉える。具体的には、「身体機能状況」、「精神心理状況」、「社会環境状況」が互いに相互に関連しているのか、さらに、それらの現状だけではなく、過去に遡り、また、今後の方向についても理解することが求められると指摘している。

アセスメントは複雑なクライアントを合理的・客観的・科学的に理解するために情報の細分化という方法で発展してきた。このような方法は一定の成果を収めたが、情報の関連性や全体性という視点を失う危険や科学的で客観性の高い「身体機能状況」を重視する傾向を導いた。1990 年代のイギリスのアセスメント方法を検証した Lloyd と Tayllor²⁸は、要素還元主義の枠組みではなく、ホリスティックな視点をもった新たな枠組みを提案した。彼らは複雑で多義的なクライアントをアセスメントする場合、要素還元主義の傾向が進展するとクライアントの本質的な事柄を見失ってしまう危険を孕むと指摘した。

ソーシャルワーク事典第 20 版で Jordan²⁹は、アセスメントする情報には、客観的情報(量的測定方法による数量化された情報)だけではなく主観的情報(質的測定方法による数量化できない情報)がある。解釈に制限がなく、そのプロセスを重視する主観的情報のアセスメントは、客観的情報のアセスメントだけでは見過ごされてしまう真実を発見する力があると指摘している。このようにソーシャルワーク辞典においても、版を重ねるごとにアセスメントに関する研究が蓄積されている。

アセスメントについては表 1 に示すように多くの研究者が定義している。これらの定義はこれまであまり系統的に分析されてこなかったが、系統的に分析することの必要性を指摘した小澤³⁰に従って、以下のような指標を目安に、①刻々と変化する過程・状況に焦点が当てられている定義(プロセスとしてアセスメントを捉えた場合)、②構造に焦点が当てられている定義(構造としてアセスメントを捉えた場合)、③目的に焦点が当てられている定義(目的としてアセスメントを捉えた場合)に分類した。

① プロセスとしてアセスメントを捉えた場合

- ・ソーシャルワーカーがクライアントの情報を把握するプロセス

- ・ソーシャルワーカーが情報を分析するプロセス
 - ・ソーシャルワーカーが分析した情報を再構築するプロセス
 - ・ソーシャルワーカーとクライアントが課題を明らかにするプロセス
- ② 構造としてアセスメントを捉えた場合
- ・ソーシャルワーカーがクライアントの情報を把握する
 - ・ソーシャルワーカーが情報を分析する
 - ・ソーシャルワーカーが分析した情報を統合する
 - ・ソーシャルワーカーとクライアントが課題を明らかにする
- ③ 目的としてアセスメントを捉えた場合
- ・ソーシャルワーカーがクライアントを理解する
 - ・ソーシャルワーカーがクライアントを評価する
 - ・ソーシャルワーカーとクライアントがクライアントの強さや課題を明らかにする
 - ・ソーシャルワーカーとクライアントが協同・参加する
 - ・ケアプランを作成する
 - ・モニタリングする

表1 アセスメントの定義

研究者名	定義	出典
Florece Vigilante, Mildred Mailick 過程・状況に 焦点が当てら れている	アセスメント過程は3つの重なり 合った仮説を基礎とする, ①人間 の現象は多数の <u>原因の相互作用</u> の 枠組みによって理解可能である, ②ニーズと資源の概念は専門職の 意図・目的・価値に影響される, ③状況の中の人間を理解すること は活動を選択するのに有効な手段 になる.	Carol H. Mayer, <i>Assessment in Social Work Practice</i> , Columbia University Press, 3(1993)
大田義弘 過程・状況に 焦点が当てら れている	アセスメントとは, 必要な情報の 収集と処理を通じ, クライアント とその生活をめぐる <u>問題と状況の</u> <u>構成</u> や要因の理解, 援助計画と実 践の展開に必要な情報の系統的提 供を目的とした援助活動の認識過 程である.	ソーシャルワークにおけるアセスメントーその 意義と方法ー, ソーシャルワーク研 究, 20(4), 261(1995)
Hodge, David,	アセスメントは, 実践を決定する	<i>Spiritual Assessment: A Review of Major</i>

R. 過程・状況に 焦点が当てら れている	ための基礎を提供する多元的な計 画につなぐ、情報収集・分析・重 要な <u>統合された情報</u> を確認する過 程	Qualitative Methods and a New Framework for Assessment Spirituality, Social Work, Vol. 46, Issue3, 203-214 (2001).
中村沙織 過程・状況に 焦点が当てら れている	アセスメントとは、利用者シス テムの問題に対して、ソーシャル ワーカーと彼ら(もしくは彼や彼 女)が可能な限り必要かつ適切な 情報を収集し、その情報に基づい た利用者システムの生活問題とそ の要因の理解や問題解決に必要な 利用者システムの潜在的能力の発 見と活用を行い、そのことを通し て支援計画の実施や実践展開に必 要な資源や方法の提供がソーシャ ルワーカーの専門的判断をふまえ て行われる協働認識過程である。	ソーシャルワーク・アセスメント コンピュータ 教育支援ツールの研究, 相川書房, 東 京, 42(2002).
Harriett M. Bartlett 構造に焦点が 当てられている	アセスメントとは理解することと 確認することである。アセスメン トはソーシャルワーカーの実践に おいて最初に行う専門的判断であ る。アセスメントは専門的知識・ 価値・技術を活用し専門的枠組み で行われる	The Common Base of Social Work Practice, National Association of Social Workers INC. New York, 159(1970).
Max Siporin 構造に焦点が 当てられている	個別援助活動の基礎となる理解の ためのプロセスと評価	Introduction of Social Work Practice, Macmillan, New York, 219(1975)
Allen Pincus, Anne Minahan 構造に焦点が 当てられている	2つの部分からなるプロセスであ る。すなわち、クライアントシス テムとその環境に関する適切な情 報の収集と介入の計画を展開する ための基礎的情報の分析から成り 立つのである	Assessment, Encyclopedia of Social Work 18th ed., NASW Press, 172(1987)
Carol H. Meyer	アセスメントは知ること, 理解す ること, 評価すること, 個々に区	Assessment, Encyclopedia of Social Work, 19th ed., NASW Press, 260-270(1995).

構造に焦点が当てられている	別すること、わかることであると述べ、もし、ソーシャルワーカーが状況・ニーズ・問題に関係している <u>要因間の関連性</u> や構造をアセスメントせずにアプローチするなら、その介入は型どおりのありふれたものになるか、その結果は成功か失敗か場当たりのになるか、ソーシャルワーカーの得意分野に偏在したものになってしまう	
Rosalie A . Kane, Robert L. Kane 目的に焦点が当てられている	高齢者のアセスメントは、診断的結論や介入的計画を直接的に導くというよりも詳しく観察することである。	Assessing the elderly; a practical guide to measurement . Massachusetts , Lexington Books, 150(1981)
Dean H . Hepworth , Ronald H . Rooney, Joann Larsen. 目的に焦点が当てられている	アセスメントとはまず膨大な情報を収集し、その情報を分析、 <u>統合すること</u> である。そして次の分野に整理することを言う。①クライアントのもっている問題の特徴の理解。これには、成長過程でのニーズ、生活転換期に伴うストレスとそれの適応には何を必要としているかの情報を含む。②クライアントと家族などの対処能力(パーソナリティの長所、限界、欠陥などを含む)。③ <u>クライアントの問題に関連しているシステム</u> 、それとクライアントとの相互作用の特徴。④問題解決、または、軽減のために必要とする資源と現存する資源。⑤クライアントの問題解決の意欲である	Direct social work practice: theory and skills 2th ed. Brooks/Cole, 165(1986)
白澤政和 目的に焦点が	アセスメントとは要援護者の社会生活上のニーズを評価し査定を	ケースマネジメントの理論と実際, 第1版, 東京, 中央法規出版, 62(1992)

当てられている定義	行うことである	
Jordan Catheleen 目的に焦点が当てられている	アセスメントとは、クライアントの強さや問題を明らかにすることを目的に情報を収集し続けることで、初期のアセスメントモデルでは、精神分析理論を基礎にしていたが、現在では、 <u>客観的情報</u> (量的測定方法による数量化された情報)だけではなく <u>主観的情報</u> (質的測定方法による数量化できない情報)も収集する。このような方法の活用は、情報の信頼性と妥当性を高めるために必要である。解釈に制限がなく、そのプロセスを重視する主観的情報のアセスメントは、客観的情報のアセスメントだけでは見過ごされてしまう真実を発見する力がある	Assessment, Encyclopedia of Social Work, 20th ed., NASW Press, 178-180(2008)
山辺朗子 目的に焦点が当てられている定義	問題あるいは問題状況における <u>さまざまなレベルの相互作用の直線的あるいは円環的因果関係の解明</u> である。具体的にアセスメントの目的とされることは、問題や問題状況のあり方、生理的、心理的、社会的要因等の <u>相互作用のあり方</u> の理解（問題をめぐる環境的・個人的要因の解明）、またクライアントの肯定的な動機付けと能力のあり方の解明（ワーカビリティの評価）、ニーズの明確化等である	第3章ソーシャルワークの援助過程 第3節アセスメント, 大塚達雄・井垣章二・沢田健次郎編, ソーシャル・ケースワーク論-社会福祉実践の基礎-, 26(4), ミネルヴァ書房, 116(1994)
渡部律子 目的に焦点が当てられている定義	クライアントの問題解決に最適な方法を見つけ出すために、クライアントと問題を取り巻く状況を「 <u>多面的・総合的に評価すること</u> 」である	第5章ソーシャルワークの実践過程 アセスメント, 社会福祉基礎シリーズ②ソーシャルワーク実践と基礎理論, 有斐閣, 134(2004).

※下線は、ホリスティック概念と共通すると判断したため筆者によって加筆

これらの定義は、刻々と変化する過程・状況に焦点が当てられている定義と、目的に焦点が当てられている定義が多かった。しかし、重点を置いている部分が異なるだけで、明確に区分できるものではなかった。特に、Jordan の定義は、クライアントの強さや問題を明らかにすることを目的にしているが、情報を収集し続けるというプロセス性もみられた。さらに、情報には客観的情報と主観的情報があるという構造的な内容も含まれていた。

これらの定義において共通している点は、クライアントから複数の情報を把握(または収集)すること、そして課題(または問題、ニーズ等)を成立させている要因を明らかにすること(または分析、認識、評価等)であった。一方、数は少ないが、個々別々の情報を1つにまとめることを意味する総合あるいは統合という用語を使用していた定義があった。総合あるいは統合とは、クライアントから得た多数の情報を再構成するという意味があった。

日本(NDL-OPAC, NACSIS Webcat)及び英語圏(Academic search elite)で1990年代から2008年まで検索したが、ホリスティックという用語が使用されている定義はなかった。しかし、アセスメントの定義を分析すると、Vigilanteらが原因の相互作用、大田が問題と状況の構成、中村が潜在的能力の発見、協働、Hodgeが統合された情報、Meyerが要因間の関連性、Hepworthらが情報を統合すること、クライアントの対処能力、クライアントとの相互作用、山辺が問題や問題状況におけるさまざまなレベルの相互作用、渡辺が多面的・総合的に評価することという用語を使用していた。これらの用語は、ホリスティック教育の特徴をバランス、包括、つながりであるとしたMiller³¹の指摘、ホリスティック医学の重要性について言及し身体と精神の関係性を重視した中川³²や池見³³の指摘、ホリスティック看護における病気の回復過程は、患者の自己治癒力にも焦点を当てて捉えることが重要であるというJohnson³⁴の指摘と共通する部分がある。よって、これらのアセスメントの定義には、ホリスティック概念が包摂されていると考察される。

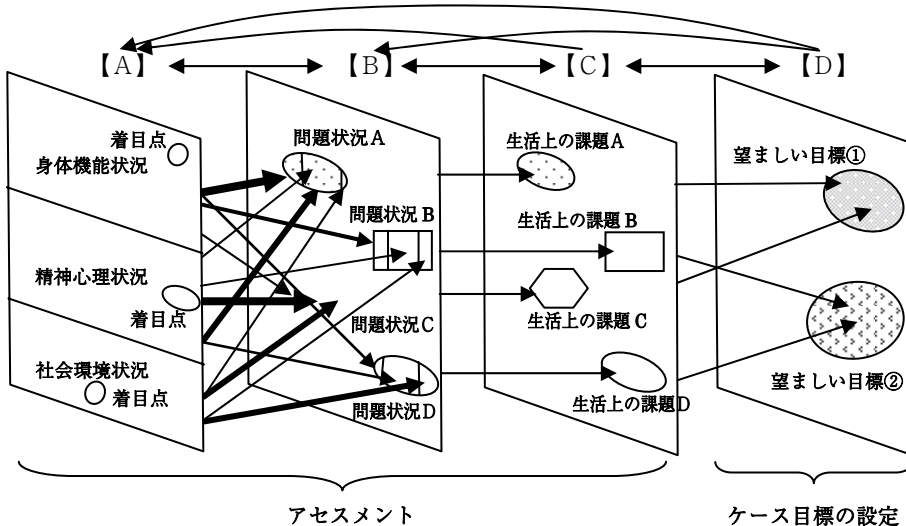
以上のような検討から、本研究では、アセスメントを「クライアントの身体機能状況、精神心理状況、社会環境状況の相互関連性を考慮しつつ、そこで発生している支障部分とクライアントの強さ(strength)に着目して必要な情報を把握し、それらを分析し、情報を再構成して特定の問題状況を編成し、ワーカーとクライアントが協同して生活上の課題を明確化し、望ましい目標の設定、援助計画の作成および援助実践を導き出していく過程である」とする。

3 アセスメントのプロセス

図1は、上記の操作的定義を説明するために、白澤³⁵の示した図に加筆したものである。

図1 アセスメントのプロセス：ホリスティック概念を視野に入れて

出典)白澤政和：ケアプランの作成について，老年精神医学雑誌，14(9)，1081-1089(2003)を一部加筆



まず、【A】は、クライアントを分解して情報を把握するプロセスである。クライアントの「身体機能状況」、「精神心理状況」、「社会環境状況」で発生している支障部分と強さに着目し、必要な情報を把握する。クライアントを理解するプロセスである。

次いで、【B】は、クライアントの情報を統合するプロセスである。3つの側面から得た情報を分析し、問題状況へと紡ぎ出していくプロセスである。問題状況を紡ぎだしていく筋道(図1において【A】から【B】への矢印の部分。なお、情報の重要性が異なるため、矢印の太さを多様化している)が分析に相当する。そして、複数の情報が再構成されて特定の問題状況として明らかになる。クライアントの理解を深めるプロセスである。

次いで、【C】は、クライアントの生活上の課題を明らかにするプロセスである。評価、認識のプロセスでもある。ソーシャルワーカーとクライアントが協同するプロセスである。専門職とクライアントとの生活課題の認識の違いが明らかになっている³⁶ことから、ソーシャルワーカーとクライアントの協同は求められる。望ましい目標設定の前段階となる。

【A】→【B】→【C】がアセスメントプロセスであり、【D】は援助計画の作成の前段階であるケース目標の設定である。このようなアセスメントプロセスを経て、望ましい目標の設定、援助計画の作成および援助実践を導くことができる。

また、問題状況は複数生じることが一般的であり、それぞれの問題状況の構造も容量も異なる。【A】→【B】→【C】→【D】への流れだけではなく、【A】から【D】へ進展した後【D】→【C】→【B】→【A】と逆流することもあるし、【D】→【B】、【C】→【A】、【D】→【A】というように飛び越えることもあるかもしれない。

本研究におけるアセスメントは、クライアントの「身体機能状況」、「精神心理状況」、「社会環境状況」の相互関連性を考慮するとともに、そこで発生している支障部分とクライアントの強さ(strength)に着目し、さらには、現時点の情報だけではなく、過去や将来の情報もつながりをもって把握し、それらの情報を再構成することである。クライアントを分解して情報を把握するが、それらを再構成して特定の問題状況を明らかにする。このプロセスに、相互作用、つながり、包括、統合、全体といった意味を持つホリスティック概念を導入することによって、クライアント理解を深めることができると考える。高齢者をアセスメントする場合は、「身体機能状況」だけではなく、「精神心理状況」や「社会環境状況」にも関心を払い、そこから得た情報を再構成する。人間は全体的存在であるという指摘³⁷⁾と合致する。

4 ケアワーカーが行うアセスメントの特徴

笠原³⁸⁾は、Redl³⁹⁾が考案した生活場面面接等を検討し、生活場面での高齢者とケアワーカーのコミュニケーションは単なるおしゃべりではなくアセスメント機能があると指摘している。須加⁴⁰⁾も、ケアワーカーは高齢者の日常生活場面で介護サービスを提供しながらアセスメントを実施していると指摘している。これらの指摘から、ケアワーカーは、生活場面で、介護サービスの提供と平行してアセスメントを実施しているということが理解できるが、外から認められる形だけではなく、アセスメント概念整理やアセスメントプロセスにおける検討で得られた知見を踏まえて、日常生活場面でケアワーカーが行うアセスメントの特徴について検討する。

第1点目は、ケアワーカーが行うアセスメントは構造化されていないという特徴をもつ。一般的にアセスメント面接では、日時・場所・所要時間・回数・社会的費用化・契約といった諸側面が設定されているが、生活場面のアセスメントは上記のような構造化は馴染まない。それはケアワーカーが介護サービスと並行して実施するアセスメントであるからである。構造化されていないからといって、ケアワーカーが行うアセスメントがその機能を十分に遂行できないわけではない。むしろ、構造化しているアセスメントと比較して、時間や場所を限定しない柔軟性があげられる。Jordan⁴¹⁾のアセスメント定義においても、質的測定方法による数量化できない主観的情報の重要性があげられ、主観的情報のアセスメントには柔軟な面接方法が求められると指摘している。このような指摘から、ケアワーカーが行うアセスメントは、主観的情報を把握することに適していると考えられる。

第2点目は、Hall⁴²⁾が「ワーカーはクライアントの環境のなかに存在している」と指摘しているように、ケアワーカーは、クライアントシステムの1つの構成要素と考えることができる。リラックスした状況にあるクライアントからは重要な情報が発信される場合が多い。しかし、Redl⁴³⁾が「集団の雰囲気巻き込まれない配慮」と指摘しているように、生活場面でのアセスメントは、他のクライアントなどの視線の中でのアセスメントであることを理解したうえで実施しなければならない。Hearn⁴⁴⁾もワーカーがクライアントシステムの中の1つの構成要素であることと、援助者としての行動とを識別しなければならないと指摘している。このような指摘は、ホリスティック教育の特徴の1つである教師と生徒の関係(教師と生徒が対話しながら問題解決の方法を学ぶ等)を包括という用語で説明したMiller⁴⁵⁾の指摘と類似する。

第3点目は、Redl⁴⁶が「危機的な場面では最初の情緒的支援である」と指摘しているように、生活場面でのアセスメントは、クライアント自身が今起こった出来事による困惑や不快感を表出している場面に出会うことがある。普段とは異なるクライアントを観察できるとともに、クライアントの困惑や不快感に直ぐに対応することができる。クライアントの置かれている場に臨場することによって、ケアワーカーはクライアントに対して専門的な感情移入を伴った共感的理解が可能になる⁴⁷。このことは生活場面のアセスメントが問題解決のプロセスにつながるということを意味する。Hallら⁴⁸は「アプローチを常態としている」、「クライアントの直接的な経験を取り扱う」と指摘している。このような指摘は、中村⁴⁹のアセスメント定義におけるクライアントの潜在的能力の発見と関連する。

第4点目は、援助関係構築のためのバイスティックの原則や共感的理解といった実践のための原則を、アセスメントを通して実践することによって、クライアントとの間に信頼関係を構築できる可能性が高い。例えば、ケアワーカーが高齢者の車いすを押している場面で、高齢者が「近ごろ妻の面会がない。なんて薄情なやつだ」と寂しそうに話したら、①「この前、面会に来られたのはいつでしたか」、②「隣のお部屋の〇〇さんも、今年に入って一度も面会がありませんね」、③「ご家族の方に連絡しましょうか」といった応答では、高齢者の心に届かないかもしれない。高齢者の言葉の表層に反応するのではなく、その言葉の裏側に潜むメッセージに応答しなければならない。④「そう、寂しいね」など、高齢者の寂しさ、不安、苛立ち、さらには、高齢者の価値観に寄り添った応答が求められる。「あなたのことをもっと理解したいと思っています」、「あなたの人格を尊重したいと思っています」といったメッセージを、日常場面で高齢者に伝えることが可能になってくる。このような指摘は、バイスティック⁵⁰が、援助関係は援助の直接的な目的とは異なるが、目的を遂行するための手段として存在する。クライアントが安心する雰囲気や関係を援助の中につくることは重要であると指摘している。高齢者とケアワーカーの援助関係は、アセスメント実施において重要な要件と考えられる。また、Hepworthらのアセスメントの定義の中で、膨大な情報を収集、分析、統合することにおいて、クライアントとの相互作用は重要な要件の1つであると指摘している。第4点目の特徴はこのような指摘と合致する。

第5点目は、ケアワーカーは、言葉で上手く訴えられないが、喜怒哀楽は同然のこと、さまざまなサインを発信しているクライアントを、ずっと同じ状態を保っていることは少ないクライアントを、様々な機会を捉えて随時アセスメントできる⁵¹。例えば、①「今日は、〇〇があって楽しみです」、②「昨日の△△は、いかがでしたか」などの声かけは、クライアントの〇〇や△△に対する意向を把握することができる。アセスメントは、ケアプラン作成のためだけではなく、終結まで途切れることなく継続されることが求められる。ケアワーカーのアセスメントは、いつでもどこでも臨機応変に継続して実施することができる。クライアントの生活課題は断片的に存在しているのではなく、多様な状況が相互に関連して発生しているため、真のクライアントに接近するためには、クライアントの生活全体を継続的に捉えることが求められる。臨機応変に継続してアセスメントできるということは、アセスメントプロセスにおける専門職とクライアントとの協同の可能性を高める。

以上のように、「柔軟性がある」、「精神的な安定の付与」、「共感的理解が可能」、「信頼関係の構築が可能」、「継続的アセスメントが可能」という5点の内容的特徴は、「アセスメントの場が日常生活場面である」、「介護サービスの提供と平行して実施している」というケアワーカーのアセスメントを具体的に説明するものであり、アセスメントの概念整理やアセスメントプロセスにおける検討で得られた知見と関連していた。

ケアワーカーが行うアセスメントは、面接室でフォーマット化されたアセスメント・シートを利用して行うアセスメントではなく、日常生活場面で、クライアントとケアワーカーの相互作用の中で、クライアントの生活全体を捉えることを可能にするアセスメントであった。身体的援助を主軸とした生活関連にともなう援助だけではなく、高齢者の生活全体を総合的に支えることがケアワーカーの業務である^{52・53・54}という指摘と一致する。

ケアワーカーが行うアセスメントの特徴には、部分と全体という範囲、分析と統合だけではなく、相互関連性、目的意識的な精神性まで意味するホリスティック概念と共通する部分が見られた。このような特徴は、ケアワーカーが行うアセスメントの実践に影響を及ぼす要因と考える。

5 まとめ

本研究で得られた知見を4点に整理する。第1点目は、ソーシャルワークの分野でのアセスメントの定義を検討した結果、研究者の定義の中には、相互作用、統合、関連性、総合、潜在的能力の発見、協働というように、ホリスティック概念に関連する用語がみられた。また、Meyer⁵⁵はアセスメントにおけるホリスティック思考の重要性を指摘している。このような結果や指摘は、アセスメントの定義の中にホリスティック概念が包摂されていることが考察された。第2点目は、アセスメントの定義の先行研究から、本研究でのアセスメントの操作的定義を、「クライアントの身体機能状況、精神心理状況、社会環境状況の相互関連性を考慮しつつ、そこで発生している支障部分とクライアントの強さ(strength)に着目して必要な情報を把握し、それらを分析し、情報を再構成して特定の問題状況を編成し、ワーカーとクライアントが協同して生活上の課題を明確化し、望ましい目標の設定、援助計画の作成および援助実践を導き出していく過程である」と示した。

第3点目は、操作的定義に基づきアセスメントプロセスを図示した。クライアントを分解して情報を把握し分析するが、それらを再構成しクライアントを全体として捉えて特定の問題状況を明らかにする。このようなプロセスを通ることによってクライアント理解を深めることができる。つまり、部分と全体という範囲を意味するだけではなく、分析と統合という思考も意味するホリスティック概念を導入することは、アセスメントの精度の向上につながると考察された。

第4点目は、アセスメントの概念整理やアセスメントプロセスにおける検討で得られた知見を踏まえて、日常生活場面でケアワーカーが行うアセスメントの特徴について検討した結果、ケアワーカーが行うアセスメントは、「柔軟性がある」、「精神的な安定の付与」、「共感的理解が可能」、「信頼関係の構築が可能」、「継続的アセスメントが可能」という5点の特徴を持って

いた。これらの特徴は、①アセスメント定義に見られた主観的情報をアセスメントすることに適している、②ホリスティック教育の特徴と類似している、③アセスメント定義に見られた潜在的能力の発見と関連する、④アセスメント定義に見られたクライアントとの相互作用と合致する、⑤アセスメントプロセスにおける専門職とクライアントとの協同の可能性を高めるといいう5点において、アセスメント定義やアセスメントプロセスとの共通項が確認された。ホリスティック概念の導入は、ケアワーカーが行うアセスメント実践を促進させる要因になると考察された。

今後の課題としては、ケアワーカーが行うアセスメントについて、①どのような情報を把握しているのか。②ケアワーカーが行う情報把握の実践度を向上させるには、ホリスティック概念が関連しているのか、さらには、③ケアワーカーが行う情報把握の実践度を向上させるためには、ホリスティック概念以外どのような要因が関連しているのかについて、実証的な観点から検証することが求められる。

引用文献

- ¹ 福井貞亮：要援護在宅高齢者の生活課題に関する研究：高齢者本人の視点に基づく生活課題の構成内容とそれに関連する個人及び環境要因に焦点をあてて、大阪市立大学大学院生活科学研究科生活科学専攻博士論文, 11(2005)。
- ² 黒田研二, 張允楨：特別養護老人ホームにおける介護職員の業務に関する意識調査報告書, 京都市老人福祉施設協議会, 16(2008)。
- ³ 三宅貴夫：高齢者の身体機能を理解する, 月刊総合ケア, 11(6), 28-33(2001)。
- ⁴ 岡村重夫：社会福祉原論, 全国社会福祉協議会, 東京, 98(1983)。
- ⁵ Smuts, J. C. : Holism and Evolution, Gestalt Journal Press, New York (1925), 石川光男・片岡洋二・高橋史朗訳, ホーリズムと進化, 玉川大学出版部, 東京, 247-268(1996)。
- ⁶ 石川光男, 高橋史郎：対談/今なぜ, ホリスティック医学・教育なのか, 現代のエスプリ, No. 355, 15-17(1997)。
- ⁷ Norman C. S. : Holism in Evolution, The Journal of Alternative and Complementary Medicine, 9(3), 333-334(2003)。
- ⁸ John Stroud: Service for Ghildren and Their Families, Aspect of Child Care for Social Work John Stroud: Service for Ghildren and Their Families, Aspect of Child Care for Social Workers, Pargamon Press, 99(1973)。
- ⁹ 社会保障研究連絡委員会: 社会福祉におけるケアワーカー(介護職員)の専門性と資格制度について(意見), 日本学術会議社会福祉, 2(1987)。
- ¹⁰ 一番ヶ瀬康子：介護福祉学の意義と意味, 介護福祉学とは何か, ミネルヴァ書房, 京都, 10(1993)。
- ¹¹ 沢田清方：ケアワークにおける専門性を考える, 介護福祉学とは何か, ミネルヴァ書房, 京都, 104-114(1993)。
- ¹² 古瀬徹：ケアワーカーの専門性と独自性—『介護福祉士』の創設の意義と今後の課題—, 社会福祉研究, 第44号, 40-42(1989)。

-
- ¹³ 初山泰弘：介護技術の内容, 社会福祉研究, 第44号, 31-36(1989).
- ¹⁴ 船曳宏保. 社会福祉としてのケアワークの構成—社会福祉方法論の再検討—. 社会福祉研究第30号, 31-36(1982).
- ¹⁵ 奥田いさよ：介護福祉の概念, 岡本民夫, 久垣マサ子, 奥田いさよ編, 介護概論, 川島書店, 東京, 7(1989).
- ¹⁶ 佐藤豊道：介護福祉の概念と枠組み, 古川孝順, 佐藤豊道, 奥田いさよ編, 介護概論, 有斐閣, 東京, 36-38(1993).
- ¹⁷ 根本博司：ケアワークの概念規定, 日本介護福祉学会編, 一番ヶ瀬康子監修, 新・介護福祉学とは何か, ミネルヴァ書房, 京都, 18-42(2000).
- ¹⁸ 白澤政和：序章 介護福祉における社会福祉援助技術の意義, 福祉士養成講座編集委員会編, 新版介護福祉士養成講座⑤社会福祉援助技術, 中央法規出版, 東京, 11-12(2003).
- ¹⁹ 山辺朗子：第3章 ソーシャルワークの援助過程 第3節 アセスメント, 大塚達雄・井垣章二・沢田健次郎編, ソーシャル・ケースワーク論-社会福祉実践の基礎-, 26(4), ミネルヴァ書房, 115(1994).
- ²⁰ Louise C. Johnson: Social Work Practice; A Generalist Approach, 3 edition, Allyn & Bacon, 219-210(1989).
- ²¹ Mellor, M. Joanna, Lindeman, David: The Role of the Social Worker in Interdisciplinary Geriatric Teams, Journal of Gerontological Social Work, Vol.30, 3-7(1998).
- ²² Carol H. Meyer: Assessment. Encyclopedia of Social Work, 19th ed., 260-70(1995).
- ²³ Meyer H. C.: Assessment in social work practice, Columbia University Press, 62-63(1993).
- ²⁴ Bradford W. Sheafor, Charles R. Horejsi: Techniques and Guidelines for Social Work Practice sixth edition, Person Education, 9(2003).
- ²⁵ 渡部律子：アセスメントの意味とその実践方法, ケアマネジャー, 10(5), 16(2008).
- ²⁶ 渡部律子：前掲書, 14-17(2008).
- ²⁷ 白澤政和：介護支援専門員のためのスキルアップテキスト専門研修課程Ⅰ対応版, 中央法規, 東京, はじめに(2007).
- ²⁸ Lloyd Margaret, Taylor Carolyn: From Hollis to the Orange Book: Developing a Holistic Model of Social Work Assessment in the 1990s, British Association of Social Work, 25, 691-710(1995).
- ²⁹ Jordan Cathleen: Assessment, Encyclopedia of Social Work, 20th ed., 178-180(2008).
- ³⁰ 小澤温：アセスメントの概念と方法, ケアマネジメント学, No. 3, 6-7(2005).
- ³¹ Miller J. P.: The Holistic Curriculum, OISE press (1988), 吉田敦彦・中川吉晴・手塚郁恵, ホリスティック教育, 春秋社, 東京 10-21 (1994).
- ³² 中川米造：医療の新しい流れ - カブラの有機システム論に就いて -, 日本ホリスティック医学協会編, 生命のダイナミクス - ホリスティック・パラダイム, 柏樹社, 東京, 131-147(1990).
- ³³ 池見西次郎：心で起こる体の病気 その実体となおし方 16版, 慶應通信, 東京, 54(1990).
- ³⁴ Johnson M. B.: The holistic paradigm in nursing; the diffusion of an innovation, Research in Nursing & Health, No.13, 129-139(1990).
- ³⁵ 白澤政和：ケアプランの作成について, 老年精神医学雑誌, 14(9), 1081-1089(2003).
- ³⁶ 福井貞亮：要介護在宅高齢者の生活課題に関する研究：高齢者本人の視点に基づく生活課題の構成内容とそれに関連する個人の及び環境要因に焦点をあてて, 大阪市立大学大学院生活科学研究科生活科学専攻博士論文, 13-14(2005).
- ³⁷ 杉英彦：老人ケアワークの原理, 老人生活研究 No.317, 老人生活研究所, 26-40(1997).

-
- ³⁸ 笠原幸子：介護福祉士の実践におけるソーシャルワークの役割-「生活場面面接」を中軸にして -, 介護福祉教育, 8(2), 19-26(2003).
- ³⁹ Fritz Redl : Strategy and Techniques of the Life Space Interview, American Journal of Orthopsychiatry X X IX, 1-18(1956).
- ⁴⁰ 須加美明：ソーシャルワークとしての側面からとらえた介護福祉での援助技術, 長野大学紀要, 24(2), 35-44(2002).
- ⁴¹ Jordan Cathleen : 前掲書, 178-180(2008).
- ⁴² Hall B., Valvano J. : Life Space Social Work A New Level of Practice, Social Casework, (66)9, 515-524(1985).
- ⁴³ Redl F. : 前掲書, 1-18(1956).
- ⁴⁴ Hearn G. : Progress toward an holistic conception of social work, The General systems approach: Contributions toward an holistic conception of Social work, Council on Social Work Education, 68(1969).
- ⁴⁵ Miller J. P. : 前掲書, 10-21 (1994).
- ⁴⁶ Redl F. : 前掲書, 5(1956).
- ⁴⁷ 久保絃章：構造化されていない面接-生活場面面接の視点から, ソーシャルワーク研究, 16(4), 18-22(1991).
- ⁴⁸ Bruce Hall, John Valvano : 前掲書, 522(1985).
- ⁴⁹ 中村沙織：ソーシャルワーク・アセスメント コンピュータ教育支援ツールの研究, 相川書房, 東京, 42(2002).
- ⁵⁰ Biestek F.P. : The Casework Relationship(=1997, 尾崎新・福田俊子・原田和幸訳, ケースワークの原則 [新訳版] 援助関係を形成する技法, 誠信書房, 東京, 30(1957).
- ⁵¹ 渡部律子：第5章ソーシャルワークの実践過程 アセスメント, 社会福祉基礎シリーズ②ソーシャルワーク実践と基礎理論, 有斐閣, 135(2004).
- ⁵² 岡本民夫：はしがき, 岡本民夫・久恒マサ子・奥田いさよ編, 介護概論, 川島書店, 東京, ii (1989).
- ⁵³ 大和田猛：社会福祉実践としてのケアワークの内容, ソーシャルワークとケアワーク, 中央法規, 169(2004).
- ⁵⁴ 蘇珍伊：特別養護老人ホームにおける介護職員の仕事での有能観に関する研究, 大阪市立大学大学院生活科学研究科生活科学専攻博士論文, 14(2006).
- ⁵⁵ Meyer H. C. : 前掲書, 62-63(1993).

